〈論文〉

20 世紀前半のブラジル黒人運動の言説にみる人種とネイション
――サンパウロ州の黒人新聞の分析から

矢　澤　達　宏

はじめに

われわれは黒人たちを統一して自分たちの国家を〔アフリカに〕建設しようとしている。その理由は。われわれはそうするように強いられているからだ。世界中でそうするように強いられている。[…]

われわれはフランス人でありイギリス人でありアメリカ人である。だがわれわれユニヴァーサル・ニグロ向上協会は、黒人の間における国籍問題を真剣に検討した［…］そしてわかったことは、支配集団の人種的思想と抵触する場合には、われわれの国籍はまったく意味をなさないことを発見した。　（ガーヴィー 2008［1922］: 248;〔　〕内引用者）

ブラジル人種（Raça Brasileira）の「重要な」構成要素たるブラジルの黒人たちの際限なき惨めさを見よ。[…]

ブラジルの発展への貢献という、われわれが生きてきた雄壮な過去の栄光さえ、あらゆるかたちの偏見・差別[1]を前にしては、われわれの災いを取り除き、われわれをネイションの概念のなかに完全かつ絶対的に含めさせるには足りぬほどである［…］

ブラジル人たるわれわれが白人同胞に比して、そしてより腹立たしい

ことに〔移民などの〕外国人に比して、劣った尊厳のないひどい地位へと追いやられている。

［…］ブラジルの黒人の問題はブラジル社会の「あらゆる」分野（政治、社会、宗教、経済、労働、軍事など）における黒人の絶対的で完全なる統合の問題である。　（Santos 1929;〔　〕内引用者、強調原著）

アメリカ合衆国（以後、米国）とブラジルにおいて、それぞれの傑出した黒人運動指導者が発した 2 つのメッセージは、同じ年代ながら内容の対照性が際立っている。むろんマーカス・ガーヴィー（Marcus Garvey）のような分離主義的志向が米国の黒人運動全体を代表しているわけではないし、両国で黒人の状況がまったく同じであったわけでもない。とはいえ、どちらの国でも人種主義という名の逆境に黒人たちがあえいでいたことに変わりはない。

ブラジルに関していえば、20 世紀前半の黒人運動はアルリンド・ヴェイガ・ドス・サントス（Arlindo Veiga dos Santos）が訴えたような統合志向一辺倒であった。筆者は以前、同時期の黒人新聞の内容分析を通じ、米国でのパン・アフリカニズム的な黒人運動をたびたび記事にしながらも、自分たちの運動の方向性はけっしてそれに同調させることはなかったことを明らかにした（矢澤 2000）。いったいなぜであろうか。1888 年に奴隷制が廃止されて以降も、米国でのようにジムクロウ（Jim Crow）と呼ばれた人種分離の法制度や黒人に対するリンチこそなかったものの、サントスが嘆いたように有形無形の人種主義がはびこっていたにもかかわらずである。その理由については、少なくとも体系的な分析やしっかりとした検証はなされていない。

ところでブラジルについては、よく知られているように同国出身の歴史家・社会学者ジルベルト・フレイレ（Gilberto Freyre）が『大邸宅と奴隷小屋（Casa grande e senzala）』で提起して以降、人種間の関係が協調的で異なる人種と文化の混淆を特徴とする社会であるとの見方が絶大な影響力を持つに至った。そこで先の問題意識に引き寄せて考えるなら、そうしたブラジル社会のとらえ方が黒人運動の統合志向に何らかの影響を与えていたのではな

いかという仮説が思い浮かぶ。つまり黒人に対しても白人と対等なかたちでの包摂を謳う言説が、統合実現に向けた黒人運動の期待を膨らませるところがあったのではないかということである。

ここで、一つ留意しなければならない点がある。20 世紀前半に関するかぎり、ブラジル黒人運動はジェトゥーリオ・ヴァルガス（Getúlio Vargas）による独裁的体制の樹立により 1937 年で実質的に停止へと追い込まれた。『大邸宅と奴隷小屋』の刊行は 1933 年であるものの、「人種民主主義（democracia racial）」の名のもとフレイレ流のブラジル認識が定着していくのは 1940 年代以降のことである。1920 年代から 30 年代にかけての黒人運動最盛期にはフレイレの著作から直接の影響はなかったと考えるのが妥当であろう。ただ、フレイレの議論はゼロから突如生じたたわけではない。実際、19 世紀中にはすでにその原形と呼びうるような見方が存在していたことをこれまでの研究[2)]が明らかにしている。

そこで本稿は、人種民主主義や「混血が生み出したブラジル人」といったイデオロギーの源流が 20 世紀前半のブラジル黒人運動に影響を与えたのか否か、与えたのだとすればどのようなかたちでだったのかを明らかにすることを目的とする。20 世紀初頭の時点ではどの程度のものを源流として想定できるかについては、先行研究に依拠するかたちでその概略を確認するにとどめ、その影響の如何をサンパウロ州で数多く発行された黒人新聞紙面をおもな分析材料として検証することの方を主眼とする。黒人新聞の発行はこの時期の黒人運動を特徴付ける主要な活動形態の一つであり、その紙面は当時の黒人運動家たちの認識や考えを知る上でもっとも重要な史料である。

ブラジル黒人運動は局面に応じて異なる方向性を示してきたが、そうした方向性の相違、変化がいかなる要因によりもたらされるのかを検討する上で、本稿は重要な示唆を与えうると考える。また同様に、米州地域におけるアフリカ系の人々の地位向上、境遇改善を目指す運動に、国や地域の違いという要因がどのようなかたちでヴァリエーションをもたらすのかという分析にもつながっていけばという期待もある。

Ⅰ　先行研究の整理と問題設定

20世紀前半のサンパウロ州における黒人運動に関しては相当な数の研究が積み重ねられてきた。そのわりに、本稿が意図するようにブラジルの人種やネイション[3]をめぐる見方と関連づけて分析しているものは意外なことに少ない。

そうしたなかにあって、前節で提示した問題意識ともっとも通底していると思われる見解は、ともに米国の研究者の手になる2つの著作のなかに見いだせる。バトラーは「1920年代、30年代のサンパウロの黒人運動家たち」は「個々人が自身の状況を能力により改善できるような人種民主主義の実現を基本的には信じていた」とする（Butler 1998: 65）。アンドリューズも「（黒人運動家たちにとって）人種民主主義の神話は崩れ去っていた。人種民主主義への願望は依然としてすこぶる健在であった」（強調原著）とやや言い方を換えて指摘している（Andrews 1991: 139）。ただ、両者ともなぜそのようにいえるのか明確な根拠は示していない。またアンドリューズは、次節でみるような米国との対比によりブラジルを人種偏見・差別のない社会としてイメージする発想が、黒人運動により共有される場面もあったことを指摘している（Andrews 1996: 489）。しかしながらそうした事実以上のこと、すなわちその理由や意図などについては踏み込んでいない。

一方、ネイションとしてのブラジル人像の希求とその障害となっていた人種主義思想[4]とが、黒人運動にどのように投影されているのか探ったものとして、リオデジャネイロ連邦大学の歴史教育の専門家ペレイラが同大学の学部生リマとともにまとめた論考（Pereira e Lima 2014）を挙げることができる。知識人たちは独立以来、奴隷制が廃止され共和国となって以降はとりわけ、ヨーロッパの諸国民にひけをとらないネイションとしての特質を模索してきたが、ブラジル人の半分近くを占める黒人種や人種間の混血を否定的にとらえる人種主義思想の影響を前にして、その肯定的な方向性を見いだせずにいた。ただこのペレイラとリマの論考でも、当時ブラジルの多くの知識人たちが唱えた白色化（branqueamento）[5]に対する反発が黒人新聞にみられ

たことなど、いくつかの点を除いては十分に議論されていない。

こうした研究状況も踏まえた上で、前節よりもう少し絞り込んだかたちで問題設定をしておこう。本稿では、黒人新聞における言説のうち、人種間の関係とネイションとしてのブラジル人という 2 点に関するものに焦点を合わせることとする。この 2 つは頻繁に言及された主要な関心事であったのみならず、前者は黒人新聞の論調に、後者は同時代のブラジル知識人たちの見解に揺らぎや不一致が見られた主題でもあった。そこで、これら 2 つの点それぞれについてあらためて黒人新聞がどのように論じているかをまず確認し、その上でフレイレにより洗練されたものとなる前のブラジル認識がそこにどのように影響を与えていたのかの検討をおこなうこととする（Ⅲ節・Ⅳ節）。それに先だって、こうした分析に必要な程度においてフレイレ以前のブラジルの人種間関係、ネイションのとらえ方をあらかじめ特定しておく（Ⅱ節）という流れで議論を進めたい。

なお分析の材料とする黒人新聞は 20 世紀前半にサンパウロ州内で発行されたものとし、筆者が複写を入手しえた限りでいうと 1903 年から 1940 年まで 23 紙、累計で 331 号に及ぶものである[6)]。

Ⅱ 「人種の天国」言説と黒人を含む「ブラジル人」の構想 ――フレイレの議論の源流

人種偏見を持たず人種間の混血からなるというブラジル人像が 20 世紀の中盤を中心に内外を席巻していく上で、『大邸宅と奴隷小屋』という著作が果たした役割の大きさについてはあらためて論ずるまでもない。ただ、その根幹といってもいい発想そのもの、すなわち異人種間の融和と混淆はフレイレがとりあげるよりもはるか以前から流通していたことはそれほど知られていない。『大邸宅と奴隷小屋』の意義とはなによりも、奴隷制下のさとうきび農園における農園主一家と奴隷との関係や黒人、先住民からの文化的影響を学術的なかたちで論じることにより、漠然とした印象にその裏付けとなるような具体的な内実を与え、説得力を持たせた点にある。だからこそ、それ

らを誇るべきブラジル人像の核として称賛した彼のメッセージが多くの人々の共感を呼んだのであろう。

では調和的な人種間関係という見方のもともとの起源はどこにあったのだろうか。米国とブラジルの奴隷制廃止の比較研究を手がけてきたアゼヴェドによれば、19 世紀に入るとヨーロッパや米国の奴隷制廃止運動家たちのあいだで、後者における奴隷制の残虐性を際立たせる意図のもと、それとの対比でブラジルが「人種の天国（paraíso racial）」というイメージとともにしばしば言及されるようになったという（Azevedo 1987: 76–82; 1996: 152–159）。彼女は、奴隷制廃止運動家たちのそうしたイメージの源泉がイギリス人旅行作家ヘンリー・コスター（Henry Koster）のロンドンで出版されたブラジル滞在記（Koster 1816）であったのではないかと推察している（Azevedo 1996: 155–156）。主人が奴隷を人間的に扱っている、自由身分の有色人が社会的上昇を実現している、人種偏見が存在しない、など表現のヴァリエーションは様々であるが、こうしたブラジルの「人種の天国」的イメージへの言及は 19 世紀に書き残されたもののあちらこちらに見いだすことが可能である。

これらの見方は、やがてブラジルの奴隷制廃止運動家たちにも共有されるようになっていく。「ブラジルでは奴隷制は人種間の混淆であり、合衆国ではそれは人種間の戦争である」（Nabuco 1976［1900］: 126）、「奴隷制は、われらにとって幸いなことに、［…］2 つの人種の相互の憎悪を生み出さなかった」（Nabuco 2000［1883］: 16）といったジョアキン・ナブーコ（Joaquim Nabuco）の著作の一節はしばしばひきあいに出される。こうした認識は混血を含むより広い範囲の知識人たちのあいだにも広まっていたことをアンドリューズは指摘している（Andrews 1991: 131）。彼の引用している混血の知識人ティト・リヴィオ・デ・カストロ（Tito Livio de Castro）の「偏見を和らげる持ち前の民主主義的精神の結果、［…］農園は人種間の争いなど起こることなく形成された」（Castro 1889）という一節は、驚くほどフレイレの議論に類似している。具体性には欠けるものの異なる人種同士が調和的に暮らしているという見方そのものは、20 世紀に入る頃までにはかなり流布して

いたと考えてよいだろう。

一方、混血のブラジル人という認識の方はどうであろうか。ブラジルというネイションを 3 人種の混淆と関連づける発想もまた 19 世紀にまでさかのぼることができる。ナブーコの「黒人種は［…］ブラジル人の不可欠な構成要素」であり、「その数え切れない献身と苦労とにより［…］他者（白人のこと）のために祖国を築いたのであって、その祖国を自分のものだということのできる資格がもっとはるかにあるのだ」（Nabuco 2000［1883］: 14–15; （　）内引用者）という一節を引きつつ、人種にまつわる諸問題を幅広く研究する社会学者ギマランエスは、やはり奴隷制廃止運動のなかに起源を求めることができるとしている（Guimarães 2004: 274）。だが実際には、さらに以前の独立期にすでに同種の表明はみられていた。「わずか数世代のうちに均質なネイションを形成することができるよう、いまこそわれわれのあいだの奴隷制をあとかたもなく葬り去るときだ。［…］身体的特徴の面でも、市民度の面でも、かくも異種混交な状態を終わりにすることはもっとも必要とされることだ」（Silva 1823: 8）という「独立の父」ジョゼ・ボニファシオ（José Bonifácio de Andrada e Silva）の主張は黒人新聞の 1 つ『ジェトゥリーノ』によっても引用されている（Guedes 1924）。多様な人種を 1 つの同質性を持ったネイションへと作りかえていくことへの関心は独立期以来のものであったといえよう。

ところが 19 世紀も終盤に入り奴隷制廃止が近づいてくると、黒人も少なくとも法制度上は白人と対等の立場になるという現実が重くのしかかり、また折しも人種主義思想も暗い影を落としはじめた。知識人たちのなかには、黒人種の劣等性という前提条件を受け入れた上でネイション形成の悲観的な先行きを示唆する者、それゆえ「白色化」を通じた白人のネイションを目指すべきだとする者もいれば、人種主義思想を否定しネイション形成のためには他の問題に取り組むべきと唱える者もいた。たとえばこの時期の学界および言論界において精力的に発言したシルヴィオ・ロメロ（Sylvio Romero）は「ブラジル人は人種混淆を表しており、混血の国民である。それがよいか悪

いか議論するのは適当でない、それは事実でありそれで十分だ」としつつも、「いずれにせよ、[…] アフリカ人の貿易の廃止と今後も続く見込みのヨーロッパ人移民の流入により、白人が構成要素として支配的になっていく」と主張した（Romero 1888: 91–92）。

19世紀後半から20世紀前半にかけてのブラジルにおける知識人たちのネイションをめぐる思索、人種主義思想との葛藤については、米国の歴史学者スキッドモアの著作（Skidmore 1993［1974］）を皮切りに研究の著しい進展がみられてきた。ただここでは20世紀初頭の状況として、多様な人種からのネイションの統合が模索されていたものの、統合の具体的なかたちや評価・展望については様々であったという点を確認するにとどめたい。むろんフレイレが描き出したような混淆文化を共有するネイションという構想もまだそこにはない。

Ⅲ　「人種の天国」言説と差別体験の狭間で

1　人種偏見・差別の認知をめぐる論調の揺らぎ

統合志向というと黒人が直面する問題の軽微さを想像させてしまうところがあるかもしれないが、黒人運動が生起したからには、その前提としてあった、黒人の社会統合がけっして実現してはいないという現実を軽くみるべきでない。黒人たちが経済社会的上昇をこころみれば壁にぶち当たり、様々な場に立ち入ろうとすれば拒絶や排除に遭うといった状況は確実に存在した（Fernandes 1978［1964］: 13–14; Andrews 1991: 138）。要するに人種主義が彼らの統合を阻んでいたのであり、黒人運動はそのことに抗議の声を上げるために生じたのだといえる。本項では黒人新聞において人種間の関係がどのように認識され、それに対しいかなる見解が示されていたのかを見極めていきたい。

ブラジルで最初の本格的な黒人運動が浮上したサンパウロ市およびその近隣諸都市は、20世紀初頭、周辺におけるコーヒー生産を背景に急激な工業化、都市化を経験していた。少し前に奴隷制から解放されていた黒人たちの

一部も、そうしたなかで経済的・社会的上昇を果たしつつあったが、その過程でヨーロッパなどからの移民との競合に負けたり、白人から差別や排除を経験したりすることも多かった。20 世紀前半のブラジル黒人運動のおもな担い手となったのは、そうした黒人たちであった[7)]。

人種偏見・差別的事例に対する告発、非難については多くの先行研究がとりあげている。その具体的な対象として、アンドリューズは求職におけるハンディキャップや公職採用での締め出し、バー、ホテル、レストラン、理髪店での立ち入りもしくはサービス提供の拒否、市街の広場における人種ごとの空間的分離の慣習などを挙げているが[8)]、そのほかにもダンスホール、修道会、孤児院における受け入れ拒否や黒人連邦議員の選出に際しての中傷報道といったものも見受けられる[9)]。

こうした個別の事象がしばしば「偏見・差別（preconceito）」という語を使って糾弾された一方で、ブラジル黒人新聞の体系的分析としては初となる著作を残したフェラーラも指摘するように（Ferrara 1986: 115）、人種偏見・差別の存在を否定するような記述もままみられた。「こんにちブラジル全体に、黒人をブラジルの社会共同体にさらにいっそう統合していこうとする健全な意識が存在する」（*O Clarim d'Alvorada* 1929: 2）。こうした表明は上述のごとき日常的な人種差別の存在と相容れるようには思えない。それにもしそれが真実だとするなら、そもそも何のための黒人運動であろうか。

もういくつか該当する記事をみていくことにしよう。

> われわれはいかなる差別も認知しておらず、これまで説いてきたこと以上の考えを抱くものではない。[…]
>
> われわればかりが真実を語っているとはかぎらないが、かといって同胞のすべてに同調せねばならぬというわけでもない。つまり壮大な考え（ブラジルにも人種偏見・差別が存在するという考えのこと）をあれこれ論じているような人々のことである。[…]
>
> 偏見・差別が現実のものである米国では黒人のものは黒人のもの、白

人のものは白人のものであるが、ここはそうではない。ブラジルのものはすべてわれわれのものでもある。何であれ偏見・差別とはみなしえぬ些細なものを除いては。　（Leite 1926;（　）内および傍点は引用者）

われらの地における小さな偏見・差別の存在を主張する黒人が多数いる。真実ではない、わが有色人の同胞よ。存在するのはわれら有色人の幾人かの上昇をつねに阻もうとする何人かの教養のない、ねたみ深い者たちだ。　（Cunha 1927）

どちらも人種偏見・差別の存在を否定しているが、一方で偏見・差別が存在すると訴える黒人たちもいたことが述べられている[10)]。その言い回しから、両者を分けているのは体験の違いではなく、とらえ方の違いだと解されよう[11)]。同じものを偏見・差別とみなすのか、それとも些細なもの、もしくは無教養、ねたみと考えるのかということである。

とすれば、偏見・差別ととらえてもおかしくはないものをあえてそうしなかったのはなぜであろうか。繰り返しになるが、黒人運動である以上、それを現状認識として額面通りには受け取りがたいところがある。先行研究におけるスタンダードな解釈は、白人からの偏見・差別も含めた黒人の惨めな状況のおもな原因は黒人自身にあると考え、教育や品行に価値を置くよう自省を促し意識を高めるためだというものである[12)]。そうした側面はたしかにあったであろう。しかし、はたしてそれだけであろうか。

2　規範としての「人種の天国」とその限界

前項では人種偏見の有無をめぐり黒人新聞の見解が分かれていることを確認した。すでにみたような人種偏見の不在に関する言及は、「人種の天国」というブラジルの見方を意識したものであることは想像されるものの、少なくとも単純な現状認識としてそれが受け止められていたとは考えにくい。それでは「人種の天国」という見方をあえて持ち出した黒人運動家たちはいか

なる意図をもってそうしたのだろうか。黒人新聞紙面上の言説の背後にある意識に本項では迫ってみたい。

いささか長くなるが「正当化されえぬ偏見」と題された記事の抜粋からみてみよう。

> 論議の的である肌の色の偏見・差別は、米国人がときおり声高に叫んでいるものだが、ここ南米にもその模倣者たちがいる。
>
> ［…］この地域における黒人種への侮辱はつねにあの者たちから発せられるのだ、すなわち寛大なる受け入れへの返礼として、彼らを移民として受け入れることをためらうことのなかったこの国の原則を遵守すべきはずの者たちである。
>
> ブラジルには偏見・差別は存在しないし、存在してもならない。そんなばかげた排他主義は黒人がその富の種をまいた国ではびこるなどあってはならない。［…］
>
> サンパウロ市で数日前、ある事業者が心痛を理由に店舗を閉めた。
>
> 自身の息子が黒人女性と結婚したことが理由だと巨大な張り紙が伝えていた。
>
> この尊大な配管業者は、息子の嫁がここで生まれ一度も国外に出たことのないブラジル人であることも忘れ、財をなすため当地生まれの者たちを欺いたのだった。
>
> 当局はしかるべき手続きののち、この国の慣習に従わず自身が服すべき法を批判しはじめるような輩に処分を下して追放すべきだったのだ。
>
> もしわれわれの政府が必要なときにのみ黒人に目を向けるというのでなかったとしたなら、想像以上に早くまた別の差別のケースをとりあげることにはきっとならなかっただろうに。
>
> （*Progresso* 1930; 傍点引用者）

「また別の差別のケース」とは、ある娯楽・ダンスクラブの年越しパー

ティーで会員の養女である黒人の少女が退場させられたというエピソードのことを指しており、記事では引き続きこれをとりあげ、問題視している。この引用からは2つの点が導き出される。1つは「人種の天国」を現状認識ではなく、本来のブラジル、そしてあるべきブラジルの姿として位置づけている点である。それは換言すれば、様々な人々を分け隔てなく受容するいわば「古きよきブラジル」であり、規範としてのブラジルの姿であった。もう1点、そうしたブラジルを脅かす人種主義を外来のものとし、移民をその主たる担い手として想定し責任を帰すさまを指摘できる。

紙数の制約からひとつひとつ引用することはできないが、どちらの点も黒人新聞の複数紙にまたがり表明されている[13)]。また、引用記事のなかにも政府の無策を批判する部分があったが、公職からの排除に関しては、民衆のあいだでは人種偏見・差別はないとしつつ、暗におそらくは支配層を道徳的逸脱として非難する次のような記事もみられる[14)]。

> 黒人は［…］理由もわれわれには思い当たらぬままにいくつかの公職から排除されている。
>
> そうした事実は、みての通り、民衆の意識と激しく対立する。というのは民衆は実際、肌の色の偏見を抱いてはいないからである。
>
> （Carneiro 1928）

人種偏見・差別の否定がみられる記事は、本稿が対象とする範囲のかぎりでは、人種間関係について論じた記事全体のなかの少数にすぎない。それらとて「人種の天国」をブラジルの現状を表すものとして受け止めていたようには考えられない。ただ、自分たちの目的とは矛盾するようなそうした見方にあえて乗っかり、「人種の天国」をブラジルの本来あるべき姿として訴え、人種偏見・差別をそこからの逸脱として戒めるというアプローチも試みられたことはたしかであろう。

しかしながら、そうした「人種の天国」を規範として位置づけるような論

調も 1930 年頃を境にあまり見られなくなっていった。この時期の黒人運動は後半になると人種偏見・差別に対する批判のトーンが強まっていくことが多くの先行研究により指摘されている[15] が、まるでそれと反比例するかのようにである。

> サンパウロ州地方部の町々では、あらゆる商店において肌の色の偏見・差別が重大な事実となっていることがほとんどである。理髪店、バー、レストランはあらゆる理由で、あらゆる手段であわれな黒人たちをしめだしておいて、あの永遠の「ごまかし」の登場となるのだ。「ブラジルには人種偏見・差別がない。」　（*O Clarim d'Alvorada* 1930）

そして個別の事例ばかりでなく、ブラジルにおける人種主義の特性や本質についての鋭い洞察までもが現れてきた[16]。

> 実際に存在し、われら黒人にかくも損害を与える偽善的で覆い隠された偏見・差別を根こそぎにするためブラジル黒人戦線（Frente Negra Brasileira）は創設された。この偏見・差別は地下要塞を持ち、それからわれわれは自身を防御することはできない。それは隠れた位置から攻撃をしかけ、それに対する反撃から身を守っているのだ。
>
> （Rodrigues 1933; 傍点引用者）

黒人運動の姿勢が先鋭化し、人種偏見・差別に対する批判が前面に出るようになったことで、「人種の天国」という見方を持ち出す論法の効力は限りなく薄れたにちがいない。そしてしばしば引用される次のような見解は、米国との対比を通じて形成された「人種の天国」という概念が、人種主義への抗議に際しての戦略的な効用のみならず、心の片隅にあったかもしれない望みとしても黒人運動家にとってはもはや現実味を失ったかのようにさえ思える。

ブラジルのわれわれは黒人に対し何をしたのか。米国人よりも思いやりがあると自任し黒人たちをリンチはしなかった。けれど、それ以上のことをしたのだ。梅毒と怠惰のなかにうち捨て、黒人種を完全に根絶やしにしたのだ。どちらが好ましいか――ブラジルのセンチメンタリズムか、米国の残虐か。われわれのセンチメンタリズムは殺人ではないのか。米国人は年間50人の黒人をリンチする。われわれはブラジルにおいて黒人種全体を抹殺する。（Leite 1930）

3　制約としての「人種の天国」言説

人種偏見・差別の存在に対する否定は、じつは前項とは異なる、もう1つ別な文脈においてもみいだすことができる。それはおもに白人からなる主流社会から黒人運動に対して向けられた、人種間の対立を煽っているという批判に対する反論である。既存の社会において相対的に優位な地位にある白人たちの側からしてみれば、本音はともかくとして「人種の天国」はブラジル社会の現状そのものにほかならなかった。前項で引用した記事の別の箇所を引いてみよう。

そこらの外野で多くの者たちがいっている。ブラジル黒人戦線には同意できない、というのは同戦線はそのなかに黒人の構成員だけを有する団体で、悪しき人種問題をつくりだし、存在もしない恨みや偏見・差別を生み出そうとしているからだと。

［…］ブラジル黒人戦線が社会の悪意や不和、偏見・差別を吹き込むために黒人構成員を集めているなどと言明するのは、もし道義に反することでないというのなら、だとすればばかげたことである。黒人戦線の切望する目的はそのような主張とは反対のもの、すなわちいま存在している悪は取り除き、思いがけず生じてくるような悪を防ぎ、撲滅することであるというのに。（Rodrigues 1933）

これ以外にも、外部から受けた批判とそれに対する反論が黒人新聞のなかには散見される[17]。そこには運動の正統性を認めさせる上での困難さがにじみ出ている。この引用の最後の文における「悪」とはむろん人種偏見・差別のことである。この記事が掲載された『人種の声（*A Voz da Raça*）』は、当時の黒人新聞諸紙のなかでももっとも先鋭的なものとして知られるが、同紙にして反論のトーンはこの程度の控えめなものである。「悪」に言及しながらも、それはあくまで逸脱であり常態はほかならぬ「人種の天国」であるかのような物言いとなっている。ペレイラとリマの引用している「もしも私が話せるとしたなら」と題された記事は、人種偏見・差別の存在を否定してはいないものの、白人主流社会からの圧力の大きさ、そして黒人運動家の認識と本音が如実に表われているので、ここでも引用しておこう[18]。

> 黒人を白人と同等に？　一度たりとてない！　そして9月7日（独立記念日）がやってきた。独立か、死か。われわれの旗はずっとはるかによくなった。ブラジル性。そしてブラジル性を形成するため基礎が必要だった。そしてそのときはじめて3つの人種の混淆が発見されたのだ。［…］われわれの5月13日（奴隷制廃止の記念日）はわれわれの歴史上、最大の偽善だ。解放された黒人？　ブラジル市民たる黒人？　シーッ、お静かに、とにかくお静かに。
>
> （Cardoso 1931;（　）内および傍点は引用者）

このように「人種の天国」という見方は、白人主流社会を経由した間接的なかたちでも黒人運動に影響を及ぼしていたことが理解できる。人種偏見・差別を告発し、その撲滅を働きかける上で、相手がそもそもそれらの存在を否定しているという状況は大きな障害であったはずである。訴えかける相手が「人種の天国」を現状だとする以上、そのより十分な実現を目標に据えるかたちをとることが正統性を主張し、運動を着実に展開していく上ではもっとも手堅い方向性である。いくつかの先行研究[19]が黒人の意識を高める意

図によるものと分析する、人種偏見・差別を存在しないとする言明も、実のところ白人主流社会の論理に合わせた上で自分たちの主張に耳を傾けさせようとする意識が背後にはあった可能性は否定できない。黒人運動の方向性の如何に対する「人種の天国」言説の影響は、前項で見たような規範としてよりも、むしろ制約としての方が本質的といえるのではないだろうか。黒人新聞は人種偏見・差別をどれほど非難し、それをブラジル社会に根を下ろした構造的な問題とさえ認識していようとも、白人主流社会全体をそれに手を染めているとしてつるし上げるまでには至らなかったのである。

Ⅳ　黒人を中心的要素とするネイション像

1　ブラジル人としての正統性の主張

本稿のもう一つの着眼点、ネイションとしてのブラジル人のありようは黒人新聞のなかでどのように論じられていたのだろうか。こちらは人種間関係についての論調ほど複雑ではなく、単純で一貫している。

> それらの外国人たちはわれわれは白人でない、純粋な白人ではないといつもいっている。実際、われわれはそうでなく、[…] そのことを恥じる者はいかなる類いの混淆もない非文明的な地へ向けて立ち去るべきだ。だが、ここは違う。われわれは一つの人種、混血人種に属しているのだ。（Raul 1929）

この記事には人種混淆の結果としてのブラジル人という見解[20]のほか、人種主義思想に基づいたブラジル批判の存在と、それに対する反論もみてとることができる。また、単に混血人種としてとらえるのでなく、そのなかで黒人を中心的な構成要素として位置づける主張も少なからずみられる[21]。

> 様々な大陸、すなわちアメリカ、ヨーロッパ、アフリカの、そして様々な肌の色の3つの要素が1つになって1つの国民が誕生した。未来

はこの国民に歴史上における首位の座をおそらくは用意している。

［…］〔このあと領土防衛に功績のあった黒人の軍人や、技師、ジャーナリスト、法曹家などとしてブラジル史に名を残した黒人を列挙して〕

アフリカ人種の優位性の証拠は観察者の目に際立つものがある。

［…］混血していようといまいと、気性がよく、高貴な心を持ち、気高く威厳ある精神のブラジル黒人なのであり、それゆえわれわれの人種の混淆に寄与する必要な要素なのだ。（Nazareth 1924;〔　〕内引用者）

ここでは黒人が優れ、ブラジル人の形成において重要な位置を占める根拠を、黒人が過去に傑出した人物を数々輩出していることに求めているが、これは当時の黒人新聞にしばしばみられた常套手段である。

一方、ブラジル人は人種間の混血により形成されるとしながらも、白色化に対しては徹底した拒絶、非難がなされた[22]。

政府のであろうと、そうでなかろうと、オリヴェイラ・ヴィアナ（Oliveira Vianna）[23] 氏のいうようにわれらを「アーリア化（aryanizar）[24]」したいという風潮は、黒人に、インディオに、そしてこの国の社会の周縁にいる他のブラジルの混血の人々に害を及ぼす。（Santos 1929）

ただし、ごくわずかながら白色化を肯定するかのような記事も存在した[25]。

われらがなすべきことはそのこと（相互扶助のため自分たちで団結すること）であり、さらに次のことである。

われらが人種を永続させようとはしないこと、そうではなく、そう、われらは恵まれた人種、すなわち白人のなかに溶け込もう。というのは、繰り返そう、われらはアフリカ人ではなく、生粋のブラジル人なのだから。（D'Alencastro 1918;（　）内引用者）

しかし、この記事とて末尾近くで「人種の分離という狂気を広め、われわれと白人のなかにおぞましい偏見・差別を根付かせることは、ただ祖国に対する反逆罪を犯すことにほかならない」としており、単に混血の推進を唱えているのみにも思え、本当に白色化のことを意図していたのかは疑わしい。

いずれにせよ、黒人新聞のなかで言及されたブラジル人像は、典型的にはしばしば黒人を中心に据えた3人種の混血により形成されたものとして描かれ、優位な白人種が他の2人種を圧倒していくようなイメージは拒絶されるかたちでほぼ一貫していた。そして忘れてはならないのは、Ⅱ節で示したように、こうした混血のブラジル人像がナブーコなど過去の傑出した人物によっても提示されている点である。こうした事実は、黒人がブラジル人のなかにあっていかに正統で不可欠な要素であるかという主張に対する権威付けになりうる。過去および現在の偉人や知識人たちの黒人に対する肯定的な叙述や発言を黒人新聞がしばしば引用しているのは、その証しといえよう。

2　ネイションと人種をめぐる言説の影響

フレイレが提起したブラジルの見方の源流として「人種の天国」言説と並んでⅡ節で確認したのは、ブラジル人を混血のネイションとして規定しながらその評価や展望が定まらずにいる思想状況であった。それは黒人運動にはどのように投影されたのであろうか。

まず指摘できるのは、19世紀終盤から20世紀序盤にかけての様々な知識人たちの思想内容を、黒人運動家たちが十分かつ的確には把握していなかったようにみえる点である。いや厳密には、同時代の知識人たちの見解に対する黒人運動家たちの評価が、客観的なそれとは必ずしも一致していなかったというべきだろうか。

Ⅱ節で触れたロメロに対する扱いがもっともわかりやすい。すでに指摘したように、彼は黒人を称賛し混血のブラジル人像を支持したが、一方でブラジル人の白色化を予見してもいた。だが黒人新聞においては、彼の「（黒人種は）われわれの富の主たる要因であった」、「黒人がブラジルにおいてなし

てきたことすべてにおいて彼らに属する場所を要求する」といった一節の引用とともにロメロの前者の側面はクローズアップされても、後者は無視される傾向にあった（Moraes 1923）。また当時、人種主義思想のテーゼを否定した知識人たちもすでに登場していたが、たとえばそのなかのマノエル・ボンフィン（Manoel Bomfim）やエドガール・ロケッテ＝ピント（Edgard Roquette-Pinto）は黒人新聞において取り上げられてはいるものの[26]、彼らが人種主義思想を否定したことについてはなぜかほとんど触れられていない。

黒人運動家たち自身による人種主義思想に対する反駁は、過去の黒人の英傑たちを並び立てたり、ブラジルの開拓・発展に対する奴隷の貢献を抒情的に訴えるかというお決まりのパターンに終始するか、せいぜい次のような漠然とした言明にとどまった。

> ［…］外国人の著述家――ゴビノー（Gobineau）[27] やラプージュ（Lapouge）[28] のような――がここで生み出された人種の混淆を知ることなく、われわれの文明の素晴らしき飛躍も見通さずに偏見に満ち満ちてブラジルを中傷する［…］ （Moraes 1925）

ただ、そもそも彼らは人種主義思想を全面的に否定しようとしたわけではあるまい。というのも前項でみたように、自身を含むブラジル人についても「ブラジル人種」、「混血人種」などと「人種」という語を用いて表現することがきわめて多かったからである。むしろ、基本的には人種主義思想の影響を受けながら、不都合な点を場当たり的に明確な論拠もなく否定しているといった方がよく、論理性、一貫性をみいだそうとすること自体、ナンセンスというべきなのかもしれない。

ペレイラとリマが指摘した通り、ブラジルにおけるネイションの模索と人種主義思想とが錯綜する当時の状況は黒人運動にも投影されてはいた。ただし黒人新聞の紙面からは少なくとも、それぞれの主張を正確に理解した上で吟味し論評するというよりは、断片ごとに都合のよいものを取り入れ、そう

でないものは無視するといった様相が強く感じられる。そして、ネイションとしてのブラジル人がなぜ黒人を含み、なぜ黒人が中心的な要素なのかについては、同時代人の言論よりは奴隷制廃止運動家たちによる一世代前の言説にあいかわらず依拠していたといえる。ただひとつ、白色化についてだけは例外的に敏感に反応し、論拠は漠然としていたものの決然とした拒絶が示されたのであった。

おわりに

本稿では、20世紀初頭の時点における「人種の天国」イメージや混血のブラジル人をめぐる様々な思潮を、フレイレにより確立されたブラジル解釈のいわば前段として位置づけ、その黒人運動への影響について考察した。

「人種の天国」という見方は、少なくとも黒人新聞の言説の上では、仮説として提示したように単純には彼らの統合志向に結びついてはいなかった。大勢とはいえないまでも当初は「人種の天国」を規範として訴えるという方向性も模索されたが、やがてそれも見受けられなくなった。人種偏見・差別の告発、非難との両立が困難であったことがうかがわれる。

ただ、白人主流社会がブラジルの現状を「人種の天国」とみなしていたことが、黒人運動の方向性に影響を与えていたことはみてとることができた。黒人運動家たちが、直接言葉にはしないまでも「人種の天国」の実現を信じていた、あるいは願っていたかどうかは、黒人新聞の紙面からだけでは判断することができない。しかしながら白人主流社会に対し訴えかけるためには、本音はどうあれ「人種の天国」をあるべき姿として受け入れ、人種偏見・差別はそこからの逸脱として非難するというかたちをとる必要があったことはたしかであろう。

他方、混血のネイション像をめぐる知識人たちの迷いや葛藤は、黒人運動に投影されることはなかった。人種主義思想の影響が強まるなかで、黒人がブラジル人という混血のネイションの正統なる構成部分であることを主張し、白色化を否定するために持ち出した根拠は、漠然としているか、そうで

なければ時代の思潮とは必ずしもかみあったものではなかった。そうした脆さはあるものの黒人を含む混血のブラジル人という言説が、それを提起した偉大な先人たちの威光も借りつつ、人種偏見・差別や白色化に対する反論の最終的な拠り所となっていたことは間違いない。

冒頭で引用したガーヴィーは「国籍はまったく意味をなさない」と断じたが、20 世紀前半のブラジル黒人運動家にとっては必ずしもそうではなかった。ただそれは、ブラジルという国が米国に比べ黒人に対する扱いが穏当であったというような単純な意味でではない。そうではなくブラジルは、奴隷制廃止運動家や知識人といった支配的地位にある人々により、米国やヨーロッパ諸国との対比からそうした見方の確立された国なのであった。この「公的な」見方が黒人たちの実際に経験していた人種偏見・差別の現実とはいかにかけ離れたものであっても、かたちづくられてからまだ年月の浅いこの時期のブラジル黒人運動にとっては、基本的に主流社会が作り上げた土俵の上で自らの境遇改善を訴える、言い換えるなら、絵に描いた餅にすぎなかった「人種の天国」の実現を求めることが、ひとまずは現実的な方向性であったということはいえるだろう。ブラジル黒人運動の統合志向の背景として、黒人新聞の分析からはこうした事情をみてとることができる。

* 本稿の議論の原形は、日本ラテンアメリカ学会第 34 回定期大会（2013 年 6 月 1・2 日、獨協大学）において「20 世紀前半のブラジル黒人新聞にみる人種」として筆者が発表したものです。同発表にてディスカッサントを務めて下さり、貴重なご助言を下さった東京外国語大学の鈴木茂先生に、この場を借りてあらためて御礼申し上げます。さらに、本稿を査読して下さったお二方には、じつにきめ細かく目を通していただき、有益かつ的確なご指摘を多々いただきました。記して感謝申し上げます。

なお、本稿は科学研究費基盤研究（C）「変動期アフリカ系社会におけるメディア・リテラシーと公共圏の展望」（課題番号：15K03055、研究代表者：田中正隆）による研究成果の一部です。

註

1） preconceito （偏見）という語は 20 世紀前半のブラジルにおいては、こんに

ちでいう discriminação（差別）の概念をも含んだ意味合いで使われていたことを、サンパウロ大学で長く教鞭を執った社会学者フェルナンデスはかつて指摘した（Fernandes 1978［1964］: 37）。本稿もこの見解に賛同し、差別も含むと文脈から判断した場合は「偏見・差別」という訳語をあてるものとする。それ以外の場合は「偏見」、当時の表現の訳としてでない場合は適宜「偏見」、「差別」、「偏見・差別」という語を用いている。

2）　Ⅱ節において詳述しているが、とりわけアゼヴェド（1987; 1996）、アンドリューズ（1996）、ギマランエス（2004）、スキッドモア（1993［1974］）の研究を参照されたい。

3）　単に同じ国籍を持つ「国民」ではなく、帰属意識や特定の文化の共有などに基づく共同体としての「国民」を指すという意味合いを込めて、本稿では「ネイション」という語を用いる。ネイションについては様々なとらえ方があるが、19 世紀から 20 世紀前半にかけてブラジルの知識人の多くは同質性と固有性を有する共同体としてこの概念をとらえていた。ブラジル人の人種的多様性を前提とすれば、ネイションとしてのあるべき姿を構想する上では、人種の問題を避けては通れないことになる。

4）　本稿において「人種主義思想」という表現は、19 世紀終盤から 20 世紀前半にかけてヨーロッパを中心に世界的に広まった、博物学や人類学などを用いて理論化の試みられた人種主義をおもに指すものとして用いている。「科学的人種主義」などと呼ばれることもしばしばあるが、実際には疑似科学であった。にもかかわらず、ナチス・ドイツの事例を筆頭に現実社会にも大きな影響を与えた。フォンテット（1989）などを参照のこと。

5）　ヨーロッパ人移民の大量導入とそれとの混血を通じブラジル人を人種的に白人に近づけていくことを指す。

6）　20 世紀前半であっても 1945 年以降のものは本稿では分析の対象から外している。ヴァルガスの独裁体制が終わり政治状況が変わったこともあるが、フレイレの提起したブラジルの見方が広まりはじめたことで黒人運動をとりまく文脈も変化したと筆者は考えている。なお、本稿が対象とした黒人新聞資料の所蔵・公開状況については、拙稿（2016）に詳しい。

7）　詳しくは拙稿（2005: 7–9）を参照。

8）　Andrews（1991: 138）。註にそれぞれの事例に該当する記事が複数挙げられている。

9）　それぞれ以下を参照。*O Alfinete*（1918）; Florencio（1921）; Leite（1928b）; Cambará（1918）。

10）　同種の議論はほかにも *O Clarim d'Alvorada*（1927）にもみられる。

11） 同じ号に人種偏見・差別を非難する記事と、その存在を否定する記事とが同居している場合なども、そうした解釈の妥当性を高めていよう。たとえば、Oliveira（1918）と *O Alfinete*（1918）や Celso（1923）と *Getulino*（1923）など。

12） たとえば Butler（1998: 94–95）; Fernandes（1978［1964］: 34）。

13） たとえば、人種偏見を広める者は「われわれの歴史に対する無知、他のいかなる文明も考え抱いたこともない伝統的な諸価値に対する軽視の証し」だとする記述（Lima 1934）のほか、人種主義は移民が持ち込んでいるとする見方は、ほかに Souza（1929）; A. Santos（1933b）など多数。

14） 公職からの排除にくわえ、移民への優遇という点で支配層を批判する記事もある。I. Santos（1933）。

15） Andrews（1991: 153）; Butler（1998: 100–128）; Ferrara（1986: 121–141）など。

16） 本文で引用したもの以外にも、「法の名付けた『平等・博愛』という仮面をかぶりわれわれのあいだを跋扈している人種偏見・差別」といった表現もみられる。*A Voz da Raça*（1934）。

17） たとえば Oliveira（1918）のように、黒人運動の比較的早い段階でも「人種間の対立を広めている」といった批判がなされていた。

18） 同様に、人種偏見・差別が存在しないとは言明していないものの、一般紙『リオデジャネイロ日報（*Diário Carioca*）』による人種偏見・差別の存在の否定、ブラジル黒人戦線に対する非難を伝える記事もある。Soares（1934）。また、別の一般紙からの非難に反論した記事として、A. Santos（1933a）がある。

19） 註 12）を参照。

20） ほかに、たとえば U.C.（1924）; A. Santos（1933b）; Moraes（1925）など。

21） ほかに、たとえば Soter（1934）など。

22） ほかに、たとえば A. Santos（1933b）など。

23） Francisco José de Oliveira Vianna のこと。20 世紀前半のブラジルにおける白色化主唱者の代表的存在で、現在のフルミネンセ連邦大学法学部の前身において講師を務めた。

24）「アーリア化」とは「アーリア人」化することであり、「白色化」と同じ意味合いでここでは使われている。「アーリア人」とは「科学的人種主義」においてもっとも優れた人々として位置づけられ、ゴビノーによればそれは白人の祖先の 1 つで、ゲルマン系諸民族のなかにその性質がもっとも受け継がれているのだという。

25） たとえば *Auriverde*（1928）では、黒人が人種融合の過程で他と溶け合って消えていくとして、米国の黒人問題よりもずっと単純な解決策であるとしている。

26）たとえば *Progresso*（1929）はボンフィンの黒人に対する肯定的評価をとりあげているが、Santos（1934）は逆にボンフィンのことを「ブラジルにおける黒人の影響を否定している」と批判している。また、ロケッテ＝ピントについては Leite（1928a）において「黒人の文学的未熟さ」を唱えたとして非難されている。

27）アルチュール・ド・ゴビノー（Joseph Arthur de Gobineau）のこと。19 世紀フランスの著述家・外交官で、いわゆる「科学的人種主義」の先駆的存在として位置づけられている。

28）ヴァシェ・ド・ラプージュ（Georges Vacher de Lapouge）のこと。ゴビノーよりももう少し若い世代の、同じフランス出身の人類学者。やはり「科学的人種主義」の代表的人物の 1 人。

参考文献

文献

ガーヴィー，マーカス．2008［1922］．「ユニヴァーサル・ニグロ向上協会の原則」（荒このみ編訳『アメリカの黒人演説集――キング・マルコム X・モリスン他――』岩波書店），241–257 ページ．

フォンテット，フランソワ・ド．1989［1988］．『人種差別』高演義訳，白水社．

矢澤達宏．2000．「20 世紀前半のブラジル黒人新聞のなかのアフリカとアフリカ系人――アフリカ志向の観点から評価するブラジル黒人運動――」『アフリカ研究』56 号（2000 年 3 月），1–19 ページ．

―――．2005．「黎明期ブラジル黒人運動に関する予備的考察――その展開と内的動態を中心に」『敬愛大学国際研究』16 号（2005 年 12 月），1–38 ページ．

―――．2016．「ブラジル黒人新聞に関する研究動向と紙面資料の所蔵・公開状況」『Encontros Lusófonos』18 号（2016 年 12 月），41–54 ページ．

Andrews, George Reid. 1991. *Blacks and Whites in São Paulo*, *Brazil*, *1888–1988*（Madison: The University of Wisconsin Press）.

―――. 1996. “Brazilian Racial Democracy 1900–90: An American Counterpoint”, *Journal of Contemporary History*, 31（3）, July, pp. 483–507.

Azevedo, Celia Maria Marinho de. 1987. *Onda negra*, *medo branco: O negro no imaginário das elites—século XIX*（Rio de Janeiro: Paz e Terra）.

―――. 1996. “O abolicionismo transatlântico e a memória do paraíso racial brasileiro”, *Estudos Afro-Asiáticos*, n.º 30, dezembro, pp. 151–162.

Butler, Kim D. 1998. *Freedoms Given*, *Freedoms Won: Afro-Brazilians in Post-Abolition São Paulo and Salvador*（New Brunswick: Rutgers University Press）.

Castro, Livio de. 1889. “«Questões e problemas»: odio entre raças”, *A Provincia de São Paulo*, Ano XV, n.º 4154, 9 de fevereiro de 1889, p. 1.

Fernandes, Florestan. 1978［1964］. *A integração do negro na sociedade de classes*（3ª ed.）, vol. 2（São Paulo: Ática）.

Ferrara, Miriam Nicolau. 1986［1981］. *A imprensa negra paulista*（*1915–1963*）（São Paulo: FFLCH/USP）.

Guimarães, Antonio Sérgio Alfredo. 2004. “Intelectuais negros e formas de integração nacional”, *Estudos Avançados*, 18（50）, pp. 271–284.

Koster, Henry. 1816. *Travels in Brazil*（London: Longman, Hurst, Rees, Orme, and Brown）.

Nabuco, Joaquim. 2000［1883］. *O abolicionismo*（São Paulo: Publifolha）.

———. 1976［1900］. *Minha formação*（9ª ed.）（Rio de Janeiro: José Olympio）.

Pereira, Amilcar Araujo e Thayara Silva de Lima. 2014. “A questão racial e o movimento negro brasileiro no início do século XX”, em João Gabriel da Silva Ascenso e Fernando Luiz Vale Castro（orgs.）, *Raça: trajetórias de um conceito: histórias do discurso racial na América Latina*,（Rio de Janeiro: Ponteio）, pp. 147–167.

Romero, Sylvio. 1888. *Historia da litteratura brazileira*, tomo I（1500–1830）（Rio de Janeiro: B. L. Garnier Livreiro Editor）.

Silva, José Bonifacio d’Andrada e. 1823. *Representação à Assemblea Geral Constituinte e Legislativa do Imperio do Brasil sobre a escravatura*（Paris: Typographia do Firmin Didot）.

Skidmore, Thomas. 1993［1974］. *Black into White: Race and Nationality in Brazilian Thought*（Durham: Duke University Press）.

黒人新聞記事

Cambará, Joaquim. 1918. “Deputado de cor”, *O Bandeirante*, n.º 2, agosto, p. 2.

Carneiro, Gastão. 1928. “O direito dos pretos”, *Progresso*, n.º 6, 15 de novembro, p. 3.

Cardoso, Geraldo Piraja. 1931. “Si eu pudesse fallar”, *O Clarim d’Alvorada*, 2ª fase, n.º 34, 26 de julho, p. 4.

Cunha, Horacio da. 1927. “Os homens pretos e a evolução social…”, *O Clarim d’Alvorada*, n.º 30, 20 de fevereiro, p. 2.

Celso, Affonso. 1923. “O incidente do missionário”, *Getulino*, n.º 7, 9 de setembro, p. 1.

D’Alencastro. 1918. “Grave Erro!”, *O Bandeirante*, nº 3, setembro, pp. 2–3.

Florencio, Benedicto. 1921. “Carta sem cor”, *O Alfinete*, n.º 77, pp. 2–3.

Guedes, Lino. 1924. “A nossa Virginia”, *Getulino*, n.º 56, 12 de outubro, p. 1.

Leite. 1926. “Quem somos…”, *O Clarim d’Alvorada*, n.º 27, 11 de novembro, p. 3.

———. 1928a. “O negro para o negro”, O Clarim d’Alvorada, 2ª fase, n.º 6, 1 de julho, p. 1.

———. 1928b. “Mais um grito de dôr da raça desgraçada”, *O Clarim d’Alvorada*, 2ª fase, n.º 9, 21 de outubro, p. 4.

Leite, José Correia. 1930. “O grande problema nacional”, *O Clarim d’Alvorada*, 2ª fase, n.º 31, 7 de dezembro, p. 1.

Lima, Silverio de. 1934. “Irmão de origem IV”, *A Voz da Raça*, n.º 41, 11 de agosto, p. 4.

Moraes, Evaristo de. 1923. “O papel do escravo na civilização brasileira”, *Getulino*, n.º 3, 12 de agosto, p. 1.

Moraes, Evaristo de. 1925. “Os negros nos Estados Unidos e no Brasil”, *Getulino*, n.º 25, 13 de janeiro, p. 1.

Nazareth, José de. 1924. “A raça brasileira”, *Getulino*, n.º 64, 20 de dezembro, p. 4.

Oliveira. 1918. “A verdade”, *O Alfinete*, n.º 4, 12 de outubro, p. 1.

Raul. 1929. “Ha negros no Brasil, sim”, *O Clarim d’Alvorada*, 2ª fase, n.º 12, 6 de janeiro, p. 2

Rodrigues, Pedro. 1933. “A Frente Negra Brasileira”, *A Voz da Raça*, n.º 11, 3 de julho, p. 1.

Santos, Arlindo Veiga dos. 1933a. “A Frente Negra Brasileira e um artigo do Snr. Austregesilo de Athayde”, *A Voz da Raça*, n.º 2, 25 de março, p. 1.

———. 1933b. “A afirmação de raça”, *A Voz da Raça*, n.º 12, 10 de junho, p. 1.

———. 1934. “Que o negro brasileiro não se iluda!…”, *A Voz da Raça*, n.º42, 15 de dezembro, p. 1.

Santos, Isaltino Veiga dos. 1933. “Liberdade utopica”, *A Voz da Raça*, n.º 9, 13 de maio, p. 1.

Santos, Veiga dos. 1929. “Congresso da Mocidade Negra Brasileira: Mensagem aos negros brasileiros”, *O Clarim d’Alvorada*, 2ª fase, n.º 17, 9 de junho, p. 1.

Soares, Arlindo Alves. 1934. “Protestando”, *A Voz da Raça*, n.º 33, 17 de fevereiro, p. 5.

Soter, Sebastião José. 1934. “Comentando”, *A Voz da Raça*, n.º 33, 17 de fevereiro, p. 2.

Souza, Luiz de. 1929. “O momento”, *O Clarim d’Alvorada*, 2ª fase, n.º 16, 13 de maio, p. 6.

U.C. 1924. “Fusão das raças II”, *Getulino*, n.º 32, 2 de março, pp. 1–2.

無署名記事

O Alfinete. 1918. “Carta aberta”, n.º 4（12 de outubro）, p. 2.

Getulino. 1923. “?!”, n.º 7（9 de setembro）, p. 1.

O Clarim d'Alvorada. 1927. "Um monumento", n.º 34（18 de junho）, p. 2.

Auriverde. 1928. "Questão de raça", n.º 5（29 de abril）, p. 3.

O Clarim d'Alvorada. 1929. "A nossa victoria de 27 de setembro", 2ª fase, n.º 12（6 de janeiro）, pp. 1–2.

Progresso. 1929. "O negro concorreu para despertar no coração dos brasileiros o sentimento da Patria", n.º 16（26 de setembro）, p. 4.

O Clarim d'Alvorada. 1930. "Restaurant Giocondo", 2ª fase, n.º 23（25 de janeiro）, p. 2.

Progresso. 1930. "Preconceito que não se justifica", n.º 20（31 de janeiro）, p. 4.

A Voz da Raça. 1934. "Contra fatos não ha argumentos", n.º 36（28 de abril）, p. 2.

〈Resumo〉

Raça e nação no discurso do movimento negro brasileiro na primeira metade do século XX: uma análise na imprensa negra paulista

Tatsuhiro YAZAWA

Este artigo visa analisar como o protótipo da interpretação freyriana do Brasil—relações raciais harmônicas e miscigenação racial e cultural como características próprias—influenciou os discursos do movimento negro brasileiro na primeira metade do século XX. Ao contrário do caso dos Estados Unidos, onde surgiu uma orientação separatista ao lado da integracionista, o movimento naquele período procurou somente a integração do negro na sociedade brasileira. Será que a visão do seu país como uma democracia racial o levou a acreditar na realização do seu desejo? Só que a interpretação do próprio Gilberto Freyre não chegou a circular bem nos anos 1920 e 1930 quando o movimento negro atingiu o seu auge, com São Paulo sendo seu centro. Alguns elementos antecedentes como a visão do "paraíso racial" e a procura da nação brasileira incluindo o negro e o índio, porém, já existiam ainda no século XIX. Analisando a percepção e a ideia dos militantes negros expressas nos jornais negros, este artigo pretende avaliar a influência nelas desse protótipo da interpretação freyriana. O objeto da análise deste artigo limita-se aos jornais negros publicados no estado de São Paulo no período entre 1903 e 1940.

Tendo em vista que a imprensa negra surgiu principalmente para apresentar protestos contra o racismo convencional existente mesmo após a abolição da escravatura em 1888, é logico que ela incluiu denúncias de vários casos discriminatórios contra a raça negra. Entretanto também há alguns artigos que negam a existência do preconceito racial no Brasil. Essa manifestação pode ser interpretada como acusação ou prevenção contra o desvio do padrão brasileiro que é o de uma democracia racial, e não como afirmação do estado atual. Mas essa postura foi diminuindo à medida que a objeção ao racismo se acentuava, e ademais a sociedade dominante insistindo no paraíso racial como realidade brasileira levou a dúvidas sobre o objetivo do movimento negro.

O pensamento em torno da nação brasileira na época foi refletido de maneira clara no discurso da imprensa negra. Foi repetida várias vezes a tese de que o povo brasileiro é composto por três diferentes raças sendo a negra o elemento mais fundamental, enquanto o “branqueamento” da nação brasileira foi decisivamente rejeitado. O movimento negro, no entanto, não parece ter compreendido os detalhes desses argumentos de cada intelectual brasileiro e apresentou contradições no que ele manifestava. O fundamento de que o negro é o elemento mais importante da nação brasileira sempre resume-se na contribuição do negro para o desenvolvimento do Brasil como força de trabalho ou de outra forma.

Assim a visão do Brasil como “paraíso racial” foi utilizada pelo movimento negro da época, mas às vezes encontrou restrições também. Do pensamento sobre a nação brasileira ele se apoderou só da parte conveniente, que é o mito das três raças, e descartou e criticou fortemente a outra parte inconveniente que é o “branqueamento”.